

聖書：マタイ 17：1～13

説教題：彼の言うことを聞け

日時：2019年10月27日（朝拝）

今日の箇所は「それから六日目に」と始まります。「それから」とは「いつから」でしょうか。それは前の箇所を見ると分かります。そこにはペテロの信仰告白を受けて、イエス様がはっきりと自分がこれから苦しみを受け、殺され、三日目によみがえるという受難予告をされたことが書いてありました。それからあまり日数が経っていない日の出来事として今日のことが記されています。つまり今日の箇所は前回の箇所とセットで読むべきこと、密接につながっている出来事として読むべきことをこれは示唆しています。これと同じ出来事はマルコの福音書とルカの福音書にも記されていますが、そちらでもイエス様の受難予告と高い山の出来事は続けて一緒に書かれています。ですから私たちは前回の箇所を念頭に置きつつ、今日の記事を読んで行きたいと思います。

イエス様はここでペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて高い山に登られました。イエス様は時々この3人を連れて行きました。いずれも特別な場合です。12弟子の中には、その核となるこの3人のグループがあったことが分かります。さてイエス様は何をするために高い山へ登られたのでしょうか。ルカの福音書には「祈るため」と書かれています。その時、そこで不思議なことが彼らの前で起こりました。三つのことがありました。

一つはイエス様の御姿が変わったことです。2節：「すると、弟子たちの目の前でその御姿が変わった。顔は太陽のように輝き、衣は光のように白くなった。」太陽を直に見つめようとする、まぶし過ぎて私たちはその状態を続けることができません。目を傷めてしまいます。しかしこの時、イエス様は彼らの目の前でそのように輝いておられました。また着ている衣は白くなりました。マルコの福音書によれば「その衣は非常に白く輝き、この世の職人には、とてもなし得ないほどの白さであった。」と描かれています。

2つ目の不思議なこととして、エリヤがモーセとともに現れて、イエス様と語り合っていました。モーセは旧約聖書の最初の5つの書、いわゆる律法の書を主から取り次いで書き記した人。一方のエリヤは預言者の代表的人物です。この二人が現れてイエス様

とお話していました。この光景があまりに素晴らしくて、ペテロが申し出ます。「主よ、私たちがここにいることはすばらしいことです。よろしければ、私がここに幕屋を三つ造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」と。他の福音書によると、ペテロは何を言って良いのか分からなくてこう言ったと記されています。彼としては、とにかくこの素晴らしい状態が長続きしてほしい！この天国的な状態にいつまでもとどまっていたい！と願ったのでしょう。そこで幕屋を造りますから、是非ゆっくりして行ってください。いつまでもこの状態にとどまりましょうと提案したわけです。

そのペテロの言葉をさえぎるかのように、3つ目の不思議なことが起こります。まず光り輝く雲が彼らを覆います。聖書で「雲」は神の栄光が現れる場面にはしばしば出て来ます。幕屋を奉献した時、神殿を奉献した時もそうです。やがての再臨の日も、主は「天の雲に乗ってくる」と言われています。その雲の中から父なる神の声がありました。「弟子たちはこれを聞いて、ひれ伏した。そして非常に恐れた。」と記されています。さてこの出来事は何を語っているのでしょうか。

まずはっきり分かることは、ここで弟子たちはイエス様の本当のお姿を垣間見たということです。ペテロは16章16節でイエス様のことを「あなたは、生ける神の子キリストです」と告白しました。それはその時として100点満点の答え、正解でした。しかし今日の箇所を通して改めて思われることは、イエス様はこのようなどてつもない輝きに満ちたお方であられるということです。イエス様は神の子としてのお姿を人間の肉の下に隠して歩いておられましたが、その覆いかぶさっているものを少しめくれば、このように栄光に満ちているお方であられた。ヘブル人への手紙1章3節：「御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現れであり」。ヨハネの福音書17章5節：「父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。」ピリピ人への手紙2章6~7節：「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。」イエス様は神であるご自身の栄光を脇に置くことはできないとは考えないで、地上に来られ、無に等しい人間と同じ姿で歩いておられましたが、本質的にはこのようなお方でした。また前回見た16章27節に、やがての再臨の日に「人の子は父の栄光を帯びて御使いたちとともに来る」と言われていましたように、これはやがて主が再び来られる時の栄光のお姿を先取りして見せるも

のであったとも言えます。しかし私たちはこのように考える必要もあると思います。旧約聖書に、人は神を見てなお生きていることはできないとされています。罪ある人間が聖なる神のお姿そのものを見たら死んでしまうと。またヘブル人への手紙 12 章 14 節に「だれも聖くなければ主を見ることができない」ともあります。弟子たちはこの時、地上に生きている者として、まだ完全な状態には達していませんでしたから、その彼らが見た栄光は罪ある人間が見ても耐えられるレベルのものだっただろうと想像することができます。彼らが死なない程度の、輝きが幾分抑えられたお姿であった。ですから本当のお姿はさらにまさるものだろうと思います。彼らは言わばその片鱗をここで見させられたということなのでしょう。

そしてこのことと合わせて、今日の箇所が示していることは、このようなお方が自ら十字架へ進まれるということです。ここでモーセとエリヤがイエス様と話し合っていました、何を話し合っていたのでしょうか。ルカの福音書の平行記事を見ると「イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた」と記されています。つまり一言で言えば、十字架の死とその後の復活についてです。モーセとエリヤは、それぞれ律法の書と預言者の代表で、彼らは言わば旧約聖書の代表と言えます。旧約聖書はやがて神が与えてくださるメシヤについて、特にその方が身代わりの苦しみを通して救いをもたらすことを指し示して来ました。ですからイエス様はここで旧約の預言者たちと話し合い、旧約聖書に示されて来た神のみこころを確認していた、特に十字架への道確かめていたと言えます。

天からの声も同じです。5 節の「これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。」という言葉は、イエス様が洗礼を受けた時に天からあった言葉と全く同じです。簡単におさらいしますと、これは旧約聖書の二つの言葉をドッキングさせたものです。「これはわたしの愛する子」という言葉は、詩篇 2 篇 7 節の言葉で、これはイエス様が神から愛されている神の子であるという輝かしいステイタスについて語っているものです。もう一方の「わたしはこれを喜ぶ」はイザヤ書 42 章 1 節の言葉で、「仕えるしもべ」について述べた言葉です。それは特にイザヤ書 53 章で頂点に達する「苦難のしもべ」についての言葉です。つまり神はイエス様がご自分の愛する特別の子であるという輝かしい身分を証しするとともに、この方がイザヤ書が預言する主のしもべとして、人々の代わりにいのちまでもささげて救い出すお方となることを御心としていること、そのことを喜びとするということを改めて確言しておられたわけです。

9 節以降のエピソードも同じです。ペテロは高い山の上に幕屋を建てて、いつまでもこの素晴らしい栄光の状態にとどまりましょうと提案しましたが、イエス様はその山を下って行かれました。そしてあなたがたが見たことを復活の日までは誰にも話さないように！と命じられます。その理由は、これまでもたびたび見て来ました通り、人々の誤ったメシヤ理解を助長しないためです。人々は力によってイスラエルをローマの支配から救い出す政治的なメシヤ、武力的なメシヤを待ち望んでいました。ですから栄光に輝くイエス様について単純に知らせれば誤った熱狂主義をあおりかねません。ですからイエス様は十字架と復活を経るまでは言うな！と言われたわけです。

しかし弟子たちはこれを聞いて理解に苦しんだようです。そこで 10 節でイエス様にご尋ねます。「そうすると、まずエリヤが来るはずだと律法学者たちが言っているのは、どういうことなのですか。」何を聞きたくてこのように問うたのか、少し分かりにくいですが、その意味はこういうことです。律法学者たちは、まずエリヤが来るはずだと言っていました。そしてエリヤが来たらすべてを立て直すはずでした。それは旧約聖書の一番最後の書、マラキ書 4 章に書いてあります。ではそれが正しいとするならば。なぜメシヤなるイエス様が死ぬようなことが起きるだろうかということです。エリヤが先に来てこの世を立て直し、正義が回復されるなら、メシヤが殺されるというような理不尽なことは起きないのではないか。この彼らの思いは並行記事のマルコの福音書 9 章 10 節を参照するともっと良く分かります。

それに対してイエス様は答えられました。エリヤが来てすべてを立て直すというのはその通り。マラキ書にそう書かれています。ただこれは完全な意味で最終的な状態を作り出すという意味ではない。もしそうなら、メシヤの先に遣わされたエリヤがメシヤになってしまいます！マラキ書で言われている、やがて来るエリヤは、人々の心を悔い改めに導き、メシヤの到来に向けて準備させるという意味で世を立て直す働きをします。そしてイエス様はそのエリヤはすでに来たと言われます。ところが人々は彼をエリヤと認めず、彼に対して好き勝手なことをした。人の子もそのようにされると。弟子たちはこれを聞いて、イエス様はバプテスマのヨハネのことを言っているのだと気づいたと最後の 13 節に記されています。イエス様の言いたいことは、バプテスマのヨハネはメシヤの先駆者であり、その彼は人々から苦しめられた。彼はその意味でもメシヤの先駆者であった。その彼と同様に人の子も人々から苦しみを受けることになる。つまり

イエス様はこうしてご自分がこれから、ヨハネが指し示しているような苦みの道を進まれることを見つめておられるわけです。イエス様は弱いから、これから十字架の死へと引張って行かれるのではないのです。イエス様は前回、受難予告をされましたが、そこへ向かって進まれるお方は今日の箇所で見たとような栄光に輝くお方なのです。そのお方が旧約聖書の預言に従って、人々の代わりに苦しみを受け、ついにはその尊いのちさえもささげるといふ歩みへご自分から向かって行かれるのです。

以上を振り返って、今日の箇所から心に留めたい三つのことを申し上げてまとめたいと思います。まず一つ目は、イエス様とは本質的には今日の箇所に記されているようなお方であるということです。確かにイエス様は人となってくださいました。しかし神であることをやめられたわけではありません。神である方が神であることをやめることはできません。その本当のお姿が今日の箇所に示されています。このお姿を私たちもイエス様を仰ぐ時、いつも心に焼き付けていたいと思います。ペテロはこのイエス様のお姿が忘れられませんでした。そこで彼は彼の第二の手紙 1 章 16～18 節でこう記しています。「私たちはあなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨を知らせましたが、それは、巧みな作り話によったものではありません。私たちは、キリストの威光の目撃者として伝えたのです。この方が父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、このような御声がありました。『これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。』私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。」 私たちもこのことをいつも覚え、また思い巡らしたいと思いません。

二つ目はこのようなお方が十字架へ進んで身代わりをしてくださるなら、その救い出す力はとてつもないということです。ただの一人の人間が身代わりとして自分をささげたのではないのです。そのお方は今日の箇所で見たとような、この上ない輝きに満ちたお方です。とするなら、その方がご自身のすべてをささげられた犠牲はどれほどの救い出す力を持つことになるのでしょうか。たとえどんなに罪深い者でもこの方の犠牲ととりなしによって救い出せないような者は一人もいない。むしろどんな人をもそこから救い出して、恐ろしいほどの祝福に導き入れることが、この方にはおできになるのです。

そして三つ目は、だからこの「彼の言うことを聞け」と 5 節で言われていることです。この言葉は申命記 18 章 15 節に基づく言葉と考えられます。モーセはそこで、神は「私

のような一人の預言者をあなたのために起こされる。あなたがたはその人に聞き従わなければならない。」と言っていました。これは神がやがて遣わしてくださる決定的な一人の預言者、メシヤを指して語られた言葉です。その少し後の申命記 18 章 18～19 節にも、神はモーセのような一人の預言者を起こして、彼に主のことばを授けるから、もしその言葉に聞き従わない者があれば、その者にその責任を問うと語られました。その神が語って来られた約束の預言者、究極の預言者がここにいます！だからこの「彼の言うことを聞きなさい」と父なる神は語っています。他のどんな声にも勝って、この方の言うことにこそ、私たちの最大の関心と注意を払うように！と。なぜならこの方こそ私たちをあらゆる罪と悲惨から完全に救い出してくださる救い主だからです。私たちの救いのために天の高きから降りて来て、私たちの身代わりに尊いいのちを投げ出して、私たちを罪の滅びと死から救い出してくださる方だからです。私たちはこの方にこそ常に私たちの第一の耳を傾けて、この方が導いてくださる救いの道に歩みたいと思います。太陽のようにまばゆく輝くお方が、測ることなど不可能な大きな代価を払って、私たちに驚くばかりの救いを備えてくださいました。この方の言うことに聞き入り、この方にこそお従いして、私たちはこの方が導いてくださる栄光に至る救いの道を歩む者でありたいと思います。